

1 授業の目標及び内容

本授業は、2回生を主な対象として実施した旧課程に位置づくものである。本授業の目標は、①日本を中心とした教育実践史の概要と主な教育実践の意義について説明することができること、②教育実践の歴史的経緯を踏まえ、今日の教育実践の意義について自己の考えを述べることができることの2点とした。また、中核的なDPとして、「2B 教育の現代的課題への対応方法」及び「5A 専門的職業人としての使命/責任感」を掲げて取り組んだ。

授業内容の概要はシラバスに示したとおりであるが、明治期から現代までの我が国の代表的な教育実践を中心に、学習指導的側面が強いものと生徒指導的側面が強いものとに分け、具体的事例をもとに学習を進めた。事例を取り上げるに当たっては、今日の教育現場の実態と関連のあるものが多くなるよう留意した。主たる教材は、毎時間印刷配布した資料のほか、参考図書として図書館にあるシラバス図書の中から随時紹介した。

授業形態は、授業実施前に行った調査において、歴史的な教育実践に関する知識がほとんどない状態であったことを踏まえ、知識・理解に軸足を置く講義形式の場面と、獲得した知識等を踏まえて具体的事例を基にディスカッションをする場面とを効果的に位置付ける構成を基本とした。また、学生が最も興味・関心を示した「系統学習」と「問題解決学習」を取り上げた場面には、ディベートを位置付け本講座の目標に迫ろうと考えた。

2 授業評価

次ページの表は、最終回の授業の中で実施したDP対応学生認識調査に関する調査結果である。本調査結果を手掛かりに本授業を振り返ると、次のような成果と課題を挙げることができる。

まず、成果として次の2点を挙げることができる。1点目は、全ての調査項目における肯定率が80パーセント以上であるとともに、

「3A 教育活動に取り組むための技能」及び「3B 教育活動に取り組むための表現力」といった技能面の2項目と「5B 多世代にわたる対人関係形成力」の項目以外の全ての項目において、肯定率が100パーセントと非常に高い数値を得ることができたことである。本講座において中核として挙げた二つのDPに関して、一定の成果があったと捉えることができる。そうした要因として、本授業では、教育実践史に残る我が国の代表的な実践事例を、学生にとって理解が容易になるよう、学習指導及び生徒指導に分けて取り上げたこと、また、実践者の意図を考察したり、本県教育現場にも見られる今日的な教育課題と関連づけながら事例を考察させたりしたことによるものと考えられる。

2点目は、「1A 教育に関する確かな知識」及び「1B 自分の専門分野の知識」の項目において、「とてもそう思う」と回答した学生の割合が90パーセント以上を占めていたことである。コア・カリキュラムや生活綴方教育など、これまで単語としてのみ知っていたものが、具体的事例を通して学んだことにより理解が一層深まったのではないかと考えられる。

一方、課題としては次の2点を挙げることができる。1点目として、「3A 教育活動に取り組むための技能」及び「3B 教育活動に取り組むための表現力」といった技能に関する面が一部の学生に対し肯定的に認識されなかったことである。その要因としては、学生一人一人に対する配慮に課題があったのではないと思われる。本授業の受講者の中には留学生が1名在籍していたが、学生一人一人の実態を踏まえた丁寧な指導の在り方を一層工夫する必要がある。

2点目は、授業外学習の時間が「課題」「自発」とも非常に低いこと、自発的読書や自発的活動を行った学生が全くいないことである。授業においては、次時に学習する実践事例を事前学習として与え、ポイントをワーク

シートに整理してくるよう指導し、ほとんどの学生が対応できていたにもかかわらずこうした結果が出たことは理解に苦しむ面もある。丁寧な事前、事後指導が必要であったのかもしれない。また、授業の中で関連図書等の紹介は適宜行ってきたものの、自主的な活動にまで至っていない。学生に対する働きかけを一層工夫していく必要がある。

3 地域社会を核とした教育と研究のつながりについて

本授業は、主として学習指導及び生徒指導に関する過去の教育実践に学ぶ事を通して、今日の学校教育の在り方について考えることを重視して取り組むこととした。そこで、各授業で取り上げる我が国の代表的な実践事例と、本学の附属学校園や愛媛県内の小・中学校の事例を比較させながらその特色等を考察させる場を意図的に設定してきた。こうした取組の成果の一端を、次のような受講後の学生の感想の中に見ることができる。

○村を捨てる学力ではなく、村を育てる学力の大切さを主張した東井義雄氏の考え方は、農山村地域が多く人口減少が進む愛媛の教育の中でも大切にしていきたい。

○附属小学校や公立の実習校で行われている授業は、「問題解決学習」と「系統学習」の視点で整理してみると分かりやすいのではないかと感じた。

○附属小学校の運動場の隅に設けられてい

る小高い山やトンネル、中庭に設けられている自然豊かな池などでロング休みの時間などに自由に遊ぶ児童や園児の姿は、大正時代に見られた自由教育の姿と重なる所があると思う。教育の本質的な部分は、時代が変わっても変わらないと感じた。

教員養成の場においては、授業で学んだことが将来の教壇での実践につながることを意図して実施することが大切であると考えている。

4 今後の課題

本年度の取組を踏まえ、次年度に向けての検討課題として次の3点を挙げるができる。

1点目は、DPとの対応を図ったシラバスと個々の授業設計の制度を一層高めることである。その際、将来、学生が教壇に立つ場面を意識しながら内容等の構成を図りたい。

2点目は、座学が中心になりがちなかでも、技能や能力の育成も視野に入れた取組を進めることである。

3点目は、自発的な授業外学習の状況を毎時間把握し、その結果を返すことである。充実している学生の状況を授業の中で紹介するなどして意欲化を図りたい。

これら以外にも、改善事項は考えられるが、次年度は特にこの3点について重点的に取り組みたい。

〔表〕 DP 対応学生認識調査結果の度数分布(%)と肯定率(N=13 回収率 76%)

	1	2	3	4	肯定率	
1A 教育に関する確かな知識	92.3	7.7	0.0	0.0	100.0	
1B 自分の専門分野の知識	92.3	7.7	0.0	0.0	100.0	
2A 教育をめぐる様々な現代的諸課題	53.8	46.2	0.0	0.0	100.0	
2B 教育の現代的課題への対応方法	69.2	30.8	0.0	0.0	100.0	
3A 教育活動に取り組むための技能	76.9	7.7	7.7	7.7	84.6	
3B 教育活動に取り組むための表現力	46.2	46.2	0.0	7.7	92.3	
4A 自己の学習課題の明確化	61.5	38.5	0.0	0.0	100.0	
4B 理論と実践を結ぶ主体的学習	61.5	38.5	0.0	0.0	100.0	
5A 専門的職業人としての使命/責任感	53.8	46.2	0.0	0.0	100.0	
5B 多世代にわたる対人関係形成力	38.5	53.8	0.0	7.7	92.3	
	0	0.5	1	2	6	M
授業外学習 (課題)	61.5	0.0	38.5	0.0	0.0	0.38hrs
授業外学習 (自発)	92.3	0.0	7.7	0.0	0.0	0.08hrs
	0	1	2	3	M	
自発的読書	100.0	0.0	0.0	0.0	0本	
自発的活動	100.0	0.0	0.0	0.0	0件	